【ねがいましては】

平成１９年７月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２０１号

「ガキ大将」

《子供の仲間の中で、腕力が強く一同を従えている子。》と、辞書には載っています。

ある日、子どもたちと勉強のことで「あーだね、こーだね」と、話をしていました。そんな中、ある質問をしました。「学校でね、先生が『わかった人！』と、聞いたんだよ。君たちならどうする？　・・・　たぶん一度まわりを見て、手がたくさんあがっていたら自分も手を上げたりして・・・。」

この反応、勉強に弱気になっている子ならあたり前のようになっているはずです。わかっていないけれど、みんなの歩調に合わせておく。弱気にさらに拍車がかかっている子であれば、今までの自分をもっと卑屈にさせていきます。「ぼくはきっとこのクラスの中で一番のおバカさんだ・・・。」

そこにさっそうと現れる『ガキ大将』。彼はこう言い返します。「せんせい、オレ今のおはなし、わかんなかったんだ。だからもう一度お話しして。」

このような子がクラスにいる人？　と問いかけました。　・・・・・　いません。

そうなのです。今の学校からは本当にいなくなってしまったのです。『ガキ大将』

曲がったことが大きらい、けんかはするけど弱い子にはやさしい。あたり前だけれど、勉強は大の苦手。

このイメージから想像すると、ウソはつかない、ガンコ、声が大きい、いつも顔や体がよごれている・・・などなど。子供らしさの代名詞として使えそうな表現が多いのです。

このような子がクラスに一人でもいると、教室の中は結構ピシャッと締まってきます。おまわりさんがいるような雰囲気です。悪い事をすればあいつがきっと解決してくれる。誰が何を言おうと、良いことは良い、悪い事は悪い。頭が良くても悪くてもみんな平等に接してくれる。そんな雰囲気が毎日の教室にそっと漂います。もちろん担任の先生も、そんなガキ大将を頼もしく思っていますし、心から認めています。「〇〇君がいてくれるから、みんなとっても明るく元気でいられる、今日だって、君がわからないからもう一度教えてと言ってくれたから、助かった人はたくさんいるわよ・・・ありがとう。」

もしガキ大将がいなかったら、このようなことが起こってきます。

小さな言葉のいじめが飛び交うようになります。授業で答えたとき、「おまえそんなのもわかんないのか。」「ちがってんじゃんよ。」「なにやってんだよ。」男の子に多いケースです。

次に、言葉なしで・・・今まで仲良しだった７人組がいきなり６人に、口を聞かない、目を合わせない。女の子に多いケースです。

どう見てもいじめです。このようなことは今の学校社会では日常化しています。仲間はずれにされたくないので、あまり目立ったことは言わない、おとなしくしている、まわりの歩調に合わせる・・・。いじめの対象にならないための自然な『策』です。

このガキ大将の特徴、心の面で考えると『気持ちが前を向いている』ということです。逃げていません。自分の持論をハッキリと言えます。間違えるということに引け目を感じていません。「いいじゃんか、どうせオレはバカだから、間違えることには慣れてるんだ。」うらやましい心理状態なのです。

時折私は中学生たちに向かって言うことがあります。「青春って、チャレンジすること、後ずさりすること？」こたえは明白。

背中を押されるように毎日をただそっと生きている。隣が右を見れば自分も右、隣が左を見れば自分も左。そのほうが楽だから・・・。将来何になりたいかって、学校とテレビしか知らない自分には『わからない』が一番ふさわしいと思います。そのような子達が溢れています。

成績だけがあがればいい、しかも楽に、だから言われた事をただ黙って１００％こなせばいい、そうすれば成績は上がる。中学だって高校だって、上位のところへ行けるに違いない。だって〇〇高校から〇〇大学へストレートで行った人に教えてもらっているのだから。そして一流の会社へ入って給料たくさんもらって、外車に彼女乗っけてドライブさ・・・。（成績オンリーの男の子）

きょう、〇〇さんが消しゴム忘れたって、だからふたつ持っていたうちきれいな方をあげた。〇〇さんとても喜んでくれた。となりの人が喜んでくれるって、自分のこころも喜んでくれるのね。大きくなったら目の前の人がニコッとしてくれるお仕事につきたいな。（女の子）

さてこのふたり、カップルになれるかな？

ガキ大将とだったらお似合いな気がします。

どんなに間違えても、どんなに失敗しても、前向きな気持ちだけは忘れないようにしようよ。ガキ大将はいなくても、わからないからわかりませんって言えるようになろうね。この夏休み、自分をもっともっときれいにしよう。

〇〇のきれいな人に会えますように。